

られるものが3個あり、淡黄色で高さ2mm、幅0.5mmで、相互に接触して位置する。したがって、雄花の花式は、 $K_3 C_3 A(3+3) + (3+3) + (3)$  [G<sub>3</sub>]となる。但し、(3)は仮雄しべ、[G<sub>3</sub>]は心皮の痕跡である(図4参照)。

### (3) 考察

セタカミズオオバコについて、過去3年間の観察結果について筆者らの考え方を順不同に列挙すると、次のようである。

- a. セタカミズオオバコは、大滝が本会報に報告するまで、全く記録されていない可能性が高い。
- b. 前会長の原田市太郎が1950年頃、宮崎県下で入手し、名古屋大学の研究室の水槽で、2~3年間栽培したセタカミズオオバコに類似の水草は、セタカミズオオバコと若干異なる点がみられる。
- c. 文献(Dandy 1934 & 35; den Hartog 1957 &

72; 李1981)で、セタカミズオオバコに該当する水草を探してみたが、今日まで該当するものが見当たらない。強いて学名を与えるならば、ビルマ・ベトナム・海南島などに分布する *Boottia cordata* (Wall.) Dandy, 中国名で水菜花があるが、若干の疑問点があり、学名の決定は、いまだに到達していない。

d. セタカミズオオバコを最初に見たとき、帰化水草であろうと考えたが、かなり以前から局在している在来種である可能性もあると考えられる。

e. 繁殖方法には、いろいろな問題があり、これについては今後ともさらに観察・研究を続けてゆきたい。最後に、今回の現地調査に当り、地元の益村聖ならびに長田武正ご夫妻らが雨天の中を同行されたこと、生品の観察や文献の提供で、原田市太郎、大場秀章、文献の提供で田中啓幾・角野康郎の諸先生に多大のご協力を頂いたことを付記し、ここに厚く御礼申しあげる。

1983年1月30日記

### ○沖 陽子「水生雑草ホテイアオイの環境要因に対する生育反応及び繁殖力に関する研究」

(1982年、A4版184頁)

著者がこれまでに行なってこられたホテイアオイに関する研究を、京都大学農学研究科の学位論文としてまとめ、公刊されたものである。著者の沖さんは、日本でホテイアオイの本格的な研究に取り組みされた最初の人と申し上げても差しつかえなからう。今、その成果が一冊にまとまったわけである。

その内容の一部は、既に独立した論文として「雑草研究」等に発表されているが、この学位論文の講成を見て、10年近いこれまでの研究が、全体を見渡した周到な研究計画のもとに進められたことがよくわかる。ホテイアオイを調べておられる方には言うまでもなく、他の水草と取り組んでおられる方にもひとつの模範になりそうである。目次の主要部分を紹介しておきたい。

#### 第1章 水中の栄養塩と生育及び繁殖との関係

1. 要素欠除の影響 2. 窒素が生育・繁殖に及ぼす影響 3. リン並びにカルシウムが生育・繁殖に及ぼす影響

#### 第2章 温度と生育及び繁殖との関係

1. 実生株の生育特性 2. 成株の生育特性 3.

#### 低温に対する生育反応

#### 第3章 自然水域における生産量及び群落構造の解析

1. 個体群の生長と群落の動態 2. 水系別生産量と窒素及びリン吸収能

#### 第4章 種々の生息地における適応力

1. 種々の育成状態における生育特性 2. 種々の育成状態における組織学的研究 3. 種々の育成状態における種子繁殖

#### 第5章 総合考察

(角野)

### ○ホテイアオイ研究会 Newsletter No.1 (1982年11月、12頁)

昨年7月に発足したホテイアオイ研究会の会報第1号である。ホテイアオイだけ対象としたこのような会の設立は、植木邦和会長をはじめ、この会の創立に尽力された方々の、ホテイアオイにかける並々なぬ意欲があったことである。その発展を祈りたい。言うまでもないことだが、このような研究会の発展は、具体的な研究の充実した展開があってはじめて可能なのであって(同じことは水草研究会にもいえる)、研究者相互の情報交換や海外の研究事情の紹介の場となる会報の役割は小さくない。(3頁右下へつづく)